**13 辻　征夫『ゴーシュの肖像』**

当時、ぼくがたえず言われていたことは、①そういうことは趣味として余暇にやれということだった。高校生には高校生としてしなければいけないことが他にあるはずであり、さしあたってそれは受験勉強であろう。大学に入ったら、あるいは大学を出て社会人になったら、仕事の合間に、詩でも歌でも書くがいい。それが一般的な人間の生活の仕方であって、お前のように何もかもして頭の中を詩だけでいっぱいにしていたら、ほんとうに落伍者になってしまう……。

言われることはぜんぶ身に染みてわかっていたが、②ぼくはたいへん焦っていたのでそれらの意見に耳を貸すわけにはいかなかった。まず第一に、生涯に一篇でいいから優れた詩を残したいのに、最も感受性が鋭敏な時期かも知れない十代の終わりを、他のことにかまけて過ごすことができるだろうか。その年齢の人間にしか書けない詩があるとすれば、それはその年齢のときに書かなければならない。よしんばそれが少年の焦燥からの思考にすぎないとしても、いったいだれが、ぼくが三十歳まで生きると保証するのか。

第二に（これはこの人生で詩を選択する重要な要因になったものだが）、不幸にしてぼくに才能がなくて、結局詩は駄目だとしても――その不幸な自覚は十年二十年と詩にかかわったあと、突然動かしがたい事実として重い石のようにぼくのこころに投げ込まれるのではないだろうか――ぼくはこの管理された社会の中で、単に労働力として存在する人間にはなりたくない。たとえ人生を棒に振っても、ある純粋さを保持した、あるがままの人間でありたい……。

昨日のことのように明確に覚えている当時の心情をこうして書いていると、やはりそうとう現実ばなれのした高校生だったなと思う。いま考えればこういう年齢のときはもっとゆったりかまえていてよかったのだが、その頃はそんな余裕はとてもなくて、母の言葉によれば、「頭の上に何だかれやすいガラス細工を乗せているようで、危なっかしくて見ていられなかった」この高校生は、三年の秋には突然出奔するという無謀な事件まで起こし（このことを語ろうとするとぼくはいまでも恥ずかしさのために顔に汗が吹き出てくる）、③頭上のガラス細工を一瞬のうちに粉々に砕いてしまうのである。

詩のことはさまざまな角度から、どのようにも語ることができるから、なにもこんなふうに若年の日のごたごたを書くこともないと、昨日までのぼくなら思うのだが、ぼくには実は娘が二人いて、そろそろむずかしい年齢になってきたものだから、きみたちの父もまた親や学校と対立したりしてけっこうたいへんだったんだぜと、こんな文章を読むものかどうかわからないが、一度書いておきたくなってしまった。自分の娘に対してさえこんな感じだから、未知の高校生にどう伝わるものかとんと見当がつかない。あるいはこれはあまりに特殊な高校生活かも知れぬと思うが、人間の豊かさあるいは多様さは、どこでどんなやつがどんなことを考えて生きているかわからないというところにもあるものだ。ぼくの内面のと生活上のてんやわんやは、高校卒業後ももちろん続くのだが、そんな状況の中でいつのまにか身につけたのは、単純でしかし深いものに、ごく自然に感動するという精神の姿勢だろうか。

二十年近く前、妹が結婚するとき、一冊の詩集を贈ったが、同じ詩集の中の一篇を未知の若い人々に贈りたい。

大人になるというのは／すれっからしになることだと／思い込んでいた少女の頃

立居振舞の美しい／発音の正確な／素敵な女のひとと会いました

そのひとは私の背のびを見すかしたように／なにげない話に言いました

④初々しさが大切なの／人に対しても世の中に対しても

人を人とも思わなくなったとき／堕落が始まるのね　ちてゆくのを

隠そうとしても　隠せなくなった人を何人も見ました

私はどきんとし／⑤そして深く悟りました

大人になってもどぎまぎしたっていいんだな／ぎこちない挨拶　醜く赤くなる

失語症　なめらかでないしぐさ／子供の悪態にさえ傷ついてしまう

頼りないのような感受性

……………………………………

のり子さんの作品「む」の前半である。ぼくはこの詩に、二十代の半ばにさしかかった頃出会った。この詩はあの「夕鶴」の女優山本安英さんが、茨木さんにふっと語った言葉がもとになっている作品だが、⑥優れた詩の言葉は、いつどこでだれに働きかけるかわからない。この詩を読んだとき、僕はすでにいっぱしの酔っぱらいになっていたが、「人を人とも思わなくなったとき／堕落が始まるのね」という茨木さんの優しい語り口は、一瞬ぼくを粛然とさせたのである。現実とは遠い夢想だが、人間は何歳になっても、「頼りない生牡蠣のような」初々しい感受性を保持できるように、ほんとうは作られているのではないかと、ときどき考えることがある。

問1　傍線部①「そういうこと」とは具体的にどういうことを指すか。十字以内で答えよ。（6点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問2　傍線部②「ぼくはたいへん焦っていた」とあるが、どういうことに「焦っていた」というのか。最も適当なものを次から一つ選べ。（7点）

ア　若い頃にしか書けない詩を残したいという思いと、社会に染まらず純粋に生きたいという思いで苛立っていたということ。

イ　鋭敏な感受性が徐々に失われてゆくという思いと、自分に詩の才能がないのではないかという思いに悩んでいたということ。

ウ　死期が予想以上に早いのではないかという思いと、短命ならば奔放に生きたいという思いでやけになっていたということ。

エ　大人の正論に抗しきれないという思いと、感受性が豊かな時期は今しかないのだという思いで思案に暮れていたということ。

〔　　　〕

問3　傍線部③「頭上のガラス細工」とはどのようなものだと考えられるか。最も適当なものを次から一つ選べ。（7点）

ア　詩人として生きてゆく覚悟もないまま、ただ社会に反抗している筆者の荒廃した精神状態。

イ　世間の価値観とれない、詩に対する稚拙な思い込みをもった筆者の空虚な精神状態。

ウ　詩人になるという自分の夢が、家族を追い詰めたことに重圧を感じる筆者の不安な精神状態。

エ　純粋な感性を失わずに、詩作の道へ進もうと自らを追い込んでゆく筆者の脆弱な精神状態。

〔　　　〕

問4　傍線部④「初々しさが大切なの」とあるが、初々しさを失ったらどのようになると筆者は考えているか。最も適当なものを次から一つ選べ。（7点）

ア　何もかも放擲したすれっからしの大人になって、人生の落伍者になってしまう。

イ　単純に見えるが深みのあるものに、素直に感動する心を失ってしまうことになる。

ウ　頭上の毀れやすいガラス細工を粉々に砕いてしまい、若い無鉄砲さをなくしてしまう。

エ　前触れもなく語られる詩の言葉が、いつどこで誰に働きかけるかを認識できなくなる。

〔　　　〕

問5　傍線部⑤「そして深く悟りました」とあるが、「私」は何を悟ったというのか。それを説明した次の文章の空欄Ａ～Ｃに入る言葉を、詩および本文の中からそれぞれ指定された字数で抜き出せ。（6点）

〔Ａ（五字）〕ということの本当の意味は、自分が大人だと〔Ｂ（五字）〕、ずるがしこくなるのではなく、〔Ｃ（七字）〕を失わずに生きようとすることだということ。

Ａ＝〔　　　　　　　　　　　　　　　〕

Ｂ＝〔　　　　　　　　　　　　　　　〕

Ｃ＝〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問6　傍線部⑥「優れた詩の言葉は、いつどこでだれに働きかけるかわからない」とあるが、筆者はこの詩に出会ったとき、どのような思いを抱いたと考えられるか。七十字以内で説明せよ。（10点）

〔

〕

問7　次に挙げるのは「汲む」という詩の続きである。これについて、本文を読んだ生徒が発表を行った。詩および本文を踏まえているとは言えない発言を一つ選び、アルファベットで答えよ。（7点）

それらを鍛える必要は少しもなかったのだな

年老いても咲きたての薔薇　柔らかく

外にむかってひらかれるのこそ難しい

あらゆる仕事

すべてのいい仕事の核には

震える弱いアンテナが隠されている　きっと……

わたくしもかつてのあの人と同じくらいの年になりました

たちかえり

今もときどきその意味を

ひっそり汲むことがあるのです

Ａさん―　大人になっても純粋な感性を失わずにいたいという「私」の思いが伝わってきました。「頼りない生牡蠣のような感受性」は、後半で「震える弱いアンテナ」とも言い換えられていると思います。

Ｂさん―　本文では「頼りない生々しい感受性」を保持し続けることが大切だと述べられていますが、詩の後半では「それらを鍛える必要は少しもなかった」とあるので、純粋な感受性を保持すること自体が大切なのではないのだとわかりました。

Ｃさん―　「人を人とも思わなくなった」とは、思い通りにならない現実を受け入れてしまい、人や社会に対する繊細な「アンテナ」を失ってしまった「一般的な人間の生活の仕方」のことを指すのかもしれません。

Ｄさん―　「素敵な女のひと」は、「頼りない生牡蠣のような」「震える弱い」感受性を持っていたということでしょうか。ナイーブな感受性が「いい仕事」につながり、「背のび」をして物事を正面から捉えない態度が「堕落」につながるのですね。

〔　　　〕

【解答】

問1　詩を書くこと（詩人になること・詩を仕事にすることなどでも可）

問2　ア

問3　エ

問4　イ

問5　Ａ＝大人になる　Ｂ＝思い込んで　Ｃ＝初々しい感受性

問6　単純で深いものに感動する精神を持っていると思いこんでいたが、詩人としての初心を失っているのではないかと自分を見つめなおす気持ちになった。（68字）

（別解）詩人になる夢を追い求めていた時期が去り、大人として世俗にまみれてもいたが、詩によって、初々しい感性を失っているのではないかと気づかされた。（69字）

問7　Ｂ